

ファシリテーションガイドライン

—“多様なものの見方・考え方を理解し、尊重するためのカリキュラム”の活用に向けて—

本ガイドラインについて

このガイドラインでは、本カリキュラムを子供たちにとって有益かつ楽しい形で実践することに向けた、本カリキュラムの目的・背景、活用方法、活用する際の決まり事を記載しています。

それぞれのワークを実施する前にご一読いただき、全体像の把握、活用する際の目的・目標設定、実施時の不安解消といったご自身が苦手な部分を補うためにご活用ください。

以下の構成でご案内していきます。

- 本カリキュラムのコンセプト：我々が何を思い、何を目指しカリキュラムを作成したか
- 活用しているメソッド：カリキュラムの根底にある理論とはどんなものか
- 活用方法：どういった場面で活用ができるのか
- 活用するときの決まり事：活用に向け、留意することはなにか
- 活用の流れ：活用するときに、いつ、何に気を付けるとよいのか

本カリキュラムのコンセプト

“違ったものの見方・考え方をすると、どうやって共生していくか”

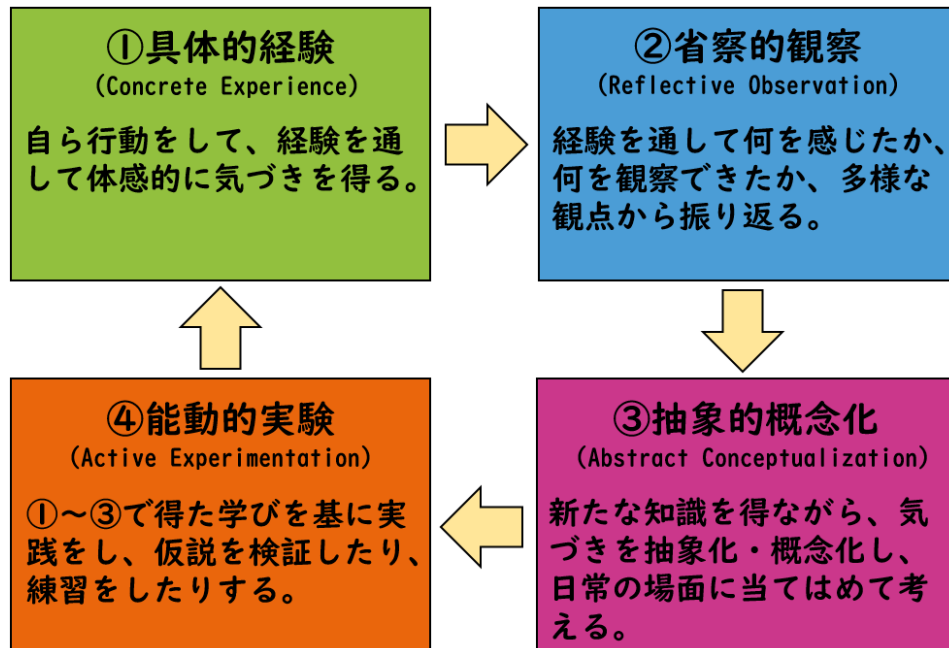
- 社会の中で人々の色々な多様さが認められていく中で、ある物事に対し自分とは違った見方をする他者との関わりは避けられないものになってきております。
- そうした中で、いかに“多様なものの見方・考え方”する他者を理解し、自分なりの上手な付き合い方を見出すかは将来の大きな社会課題の一つになると考えました。
- こういった課題設定のもと、“相手とのものの見方・考えの違いを理解し、お互いの距離を上手く取って、共存・共生すること”を目標に、柔軟な児童の段階から自分とは違った考えを理解し、尊重するためのカリキュラムを作成いたしました。

活用しているメソッド

本カリキュラムはアメリカの教育理論研究家デヴィット・コルブの“経験学習モデル”を参考（図 1 参照）にしております。

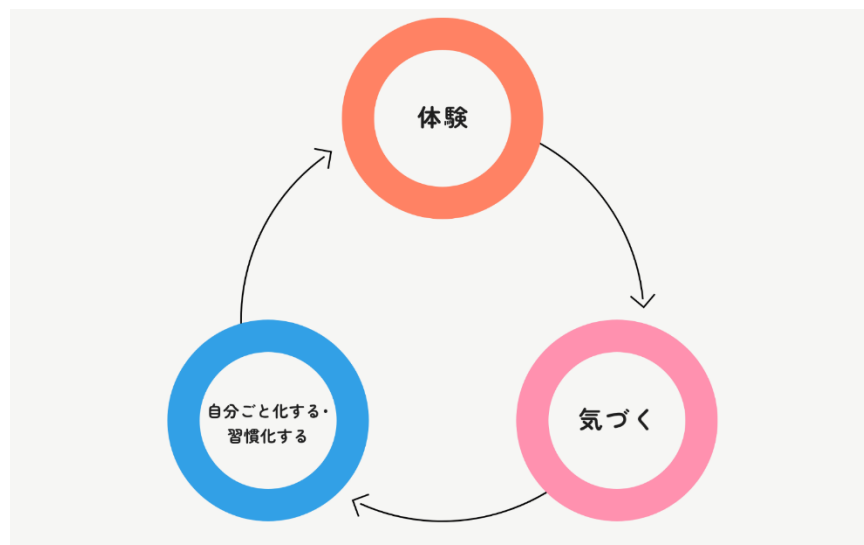
- 経験学習モデルは、①具体的経験、②省察的観察、③抽象的概念化、④能動的実験の4つのステップで構成されております。
 - ①具体的経験：経験・体験を通して気づきを得る
 - ②省察的観察：その経験で感じたこと・観察したことを振り返る
 - ③抽象概念化：気づきを抽象・概念化して類似の場面で適用できないか考える
 - ④能動的実験：①～③で得た学びを実践する

コルブの経験学習モデル 4つのステップ (図1)



- 本カリキュラムでは、個々のクラス構成・児童の発達段階の多様さを踏まえ、コルブのモデルを簡易化し、経験と実験に重きを置いた構成を採用しております。
 - まずはワークから“体験する”
 - 体験することで“気づく”
 - そして、深めた気づき・学びを実践し“自分ごと化、習慣化する”
- なお、元々のコルブの経験学習メソッドを意識した問いかけを行うと一層の効果が望めます。

本カリキュラムで意図するモデル (図2)



カリキュラムの全体像 (図3)

		目的	ワークで体感すること	ワーク	ワークの内容	必要時間※
基礎 (小学校低学年向け)	自己理解	自分のものの見方・考え方・好みに気付く	自分の考え・好みに気付くことができる	自分らしさの木・私から見たあなた	自分の好み、考え方、性格などを木の葉っぱの図に書き出すとともに、周りの人にも自分の見え方を教えてもらい、自分のことを客観視する練習をするワーク	初回45分、2回目25分
	他者理解	他者のものの見方・考え方・好みに気付く	自分自身を客観的に見ることができる	気持ちはいろいろ	自分自身や違う立場の人の感情とその理由を場面集を使って考え、自分の気持ちへの理解を深めるワーク	20-30分
	対処	違いを否定しない	同じものを見ていても、他の人は考えていることが違うことを知る	ものの見方は無限大	絵本、写真などを使い、同じモノや写真に対して多様な見方や捉え方ができることを知り、自分とは異なる見方を尊重する力を養うワーク	15分
発展 (小学校中・高学年向け)	自己理解	自分が大切にしている価値観やその変化に気付く	違った意見があっても、いったんは受け止めることができる	失敗は怖くない	失敗したことを表現することを通して、違った考えを安易に否定しない姿勢を養うワーク	20-30分
	自己理解	自分が大切にしている価値観やその変化に気付く	自分の中に大事にしていることがある	自分らしさの木・私から見たあなた(発展編)	自分の好み、考え方、価値観、性格などを書き出し、周りの人にも自分の見え方を教えてもらい、自分のことを客観視する練習を行うワーク	初回45分、2回目25分
			自分と他者で“大事”にギャップがある	気持ちはいろいろ(発展編)	“気持ちはいろいろ”の発展編として自分の考えや価値観を文章化し、人によって異なる感情が存在することを学ぶワーク	20-30分
	他者理解	自分とは違う考え方があることに気付く	相手の考えを聞く発見・面白さがある	違いは当たり前	自分が大事なもの優先順位付けをして、自分と他者の価値観の違いに気づくワーク	40-60分
			物事には色々な違った考え方があり	違う立場で考える	絵本「ふたりのもたらう」などを使い、異なる立場による考えの違いを体感し、違う立場で考えることの大切さを学ぶワーク	40-60分
	他者理解	自分と違う考え方も、価値があることを理解する	自分の中／他人にも思い込みがある	思い込みってなに？	様々な視点から“石”を観察することで、抱いているイメージと実際には差があること、自分にも思い込みがあることに気付くワーク	40-60分
			他者には他者の事情がある	色眼鏡をかけてない？	写真を使い、思考の癖とそこに隠された思い込み・先入観に気づき、事実にもとづいた物事の捉え方を学ぶワーク	40-60分
			どんな考え方も活かし方がある	意見の裏にはなにがある？	ある出来事に対する意見から、なぜそのような意見が出てくるのかをそれぞれの立場に立って考えるワーク	40-60分
			先入観が現れた時の対処を知る	違った考えの活かし方を考える	ロールプレイを通して、自分とは異なる考えにも“正しさ”があり、それに対する“活かし方”があることを学ぶワーク	40-60分
	対処	自分とは違う価値観との付き合い方を身につける	感情のままにぶつからなくても考えは伝えられる	チェック言葉～マイクログレッション～	先入観や思い込みから生まれる“チェック言葉”を自覚し、自分の言葉が相手に与える影響を考え、相手の気持ちに寄り添う姿勢を身につけるワーク	40-60分
			違った考えの人とも付き合える	“自分らしく”は怖くない	“失敗は怖くない”の発展編として、心が発達した段階で改めて心地よいコミュニケーション・自己開示の在り方を学ぶワーク	20-30分
				感情チェック	自分が今どのような状態かを把握し、よりよくしたい時はどう対処するべきかを考え、自分なりの対処法を身につけるワーク	10分
			みんなが村人だったら	ロールプレイを通して異なる価値観や考え方を持つ人と共生する練習を行うワーク	80-100分	

※部分的にご活用いただき、より短い時間での実施も可能です

活用方法

本カリキュラムは、日々の授業・アクティビティ、現場改善・トラブル防止用教材、課外活動・ワークショップなどでご活用頂けます。

■ 日々の授業・アクティビティでの活用

- ・他者との“共生”に向けたノウハウや自発性養成
 - ・他者との付き合い方という“答えのない”問いを考える思考力養成
-

■ 現場でのトラブル防止・改善教材としての活用

- ・講師の研修・勉強会での活用を通じた意識変化・児童への働きかけ方改善
 - ・児童間でトラブルが起きている時の参考または改善材料
-

■ 課外活動・ワークショップでの活用

- ・SDGs教育・ソーシャルスキル教育などの推進・発展の一環に
-

また、カリキュラムは体系的に構築しておりますが、クラス・児童の課題にあわせ、特定のワークをピンポイントで活用頂くことも可能です。

活用するときの決まり事

“子供たちを傷つけないために”

- ワークでは児童の価値観や大事なことなど根幹の部分表現してもらいますが、表現したものを否定されることは児童を傷つける危険性があり、避けなければなりません。
- そのため、ワーク実施時には毎回必ず以下のルールを伝えましょう。
 - － 「ワーク中もワーク後も、誰かの発言を否定したり、茶化したりすることは禁止です」
 - － 「意見や考えには絶対に正しいというものはないので、お互いの意見・考えを尊重し合うこと」
 - － 「誰かが意見を言っているときは、まずはしっかり聞いてから自分の意見を言うこと」

“子供たちに楽しんでもらうために”

- 自分もしくはグループで考える場面が多くあるので、普段じっと考えることに慣れていない児童が考えることに飽きてしまう、物静かな子が発言をしり込みしてしまうことがあるかもしれません。
- それを避けるため、考えることを手助けすること、発言をしやすい環境を作ることを心掛けましょう。
 - － 各ワークマニュアルに児童が困ったときの問いかけを記載しているので是非ご活用下さい。
 - － 発言に“そういうこともあるよね”と言ったり、発言の後に皆で拍手をするなど共感・賞賛を示すことや、“なんでそう思ったの、もっと知りたいな”と言って興味を示すことも有効です。

“子供たちに考えてもらうために”

- 子供たちの多くは、正解を探す習慣を持っています。そのため、ファシリテーターが「正解はないですよ」と伝えても、ファシリテーターの表情や声かけから正解のヒントを得ようとしています。
- ファシリテーターが「これが正解」という強いイメージを持っていると、ワーク中に表情や行動に無意識に表れてしまい、子供たちの思考や発言に影響を与えます。
- ファシリテーター自身が、ワーク開始前に一つ以上の答えがあることを自覚し、「そういう考え方もおもしろいね！」と想像もしなかった意見を受け入れる準備をしておくことが大切です。

活用する際の流れ

以下に、実際にワークを行う際の流れに合わせて行うべきことをまとめています

- ワーク前に心掛けること
 - マニュアルは可能な範囲で読み、個々のワークの目的はどのようなものかを理解しましょう。
 - そのうえで、ワークマニュアルの流れで授業を行うとすると、子供たちがどのような反応をしそうかを考え、困りそうなポイントでどう発言・フォローするかを考えておきましょう。
 - 余裕があれば先生同士で一度ワークを実際に行ってみることをお勧めします。
- ワークの最初に行うこと
 - 前述の“子供たちを傷つけないために”記載のワークでのルールを伝えます。
- ワーク中に行うこと
 - 初回は、ワークマニュアルに記載の目的と、ワークの流れを伝えてからワークを始めましょう。
 - 誰かを傷つける発言や行動があった際は、ルールを再周知して、それ以上の同様の発言・行動をしないよう働きかけます。
- ワークの最後に気を付けること
 - ワークを通して何を感じたのか、日常のどのような場面とひもづくか／同じことに気を付けなければならぬのかをワークマニュアルに記載の問いかけを参考にして伝え、気付きを促しましょう。
 - ワーク後に、“ワーク中の発言を否定される・茶化すことは禁止”と改めて伝え、児童の心理的安全性を高め、次のワークに取り組むモチベーションを維持していきましょう。